

令和7年度 住まい環境整備モデル事業
【課題設定型・事業者提案型】
提案内容の概要

**事業名称：TiDで実現する若者と地域を繋げる
暮らしの場**

代表提案者：杉山 真智子



×

Trauma
Informed
Design

1. これまでの取組

【課題設定型・事業者提案型】

【No.1自立援助ホームの取り組み】2013年より事業を開始。現在3ホームを運営

守山市 夢コート	大津市 碧ホーム	大津市 奏ホーム
		
定員男女9名 現在女子5名・男子4名 が入所中	定員女子6名 現在5名が入所中 2024年4月より開所	定員男子5名 現在3名が入所中 2024年4月より開所

【提案者・法人の経歴】

- 2013年 NPO法人四つ葉のクローバー設立
2016年 認定NPO法人及び自立援助ホーム認可
2019年 公益社団法人社会貢献支援財団『社会貢献賞』表彰
2020年 NHK目撃！にっぽん「見えない傷と生きていく」放送
2021年 滋賀県地域養護推進協議会との連携開始
2022年 内閣府『女性のチャレンジ賞』受賞

皆で朝ドラ「おむすび」の
撮影現場見学に行きました



1. これまでの取組

【課題設定型・事業者提案型】

【No.2居場所事業の取り組み】 卒業生と地域が繋がる Mother Board事業

施設を出た後でも気軽に訪れる事のできる居場所事業。退所後も継続して関わる事で、幅広い支援が可能に。施設の卒業生のみならず、地域の若者や親子にも開放し、多世代が利用。主な機能として、よつばLABO、よつばSALON、若者食堂の3つがある。



よつばLABO



若者たちの交流と学びの場
資格取得等の実学教育も実施

よつばSALON



親子の育ちを支える
地域親子支援

若者食堂



地域の若者、子ども、
ファミリーが集い、食事や
季節ごとの行事をしたりする

1. これまでの取組

【課題設定型・事業者提案型】

【No.3地域とつながる取り組み】施設と施設、地域と若者、若者と若者のつながり促進

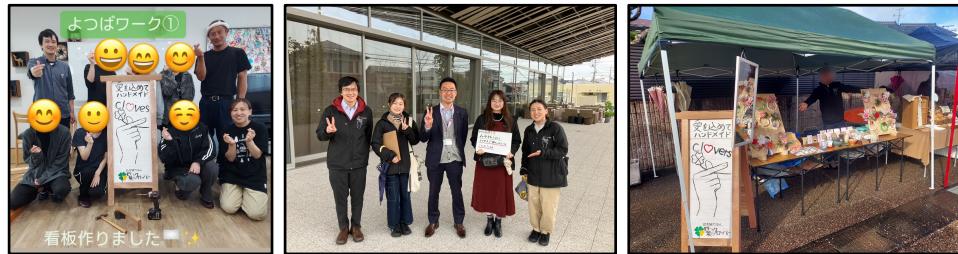
ALL滋賀

滋賀県自立援助ホーム連絡協議会を設立し、県内8施設の自立援助ホームの連携を図っている。当法人はその本部を担う。

「オールしが」実現に向け、毎月定例会議を開いており、課題や今後の取り組みについて話し合う。

よつばワーク

夢コートに入所する若者を対象に、約1年間を通した就労支援を実施。様々な職業で働いている大人と共にイベントを開催。



ドリームライブ

2014年から始まり、累計6回実施。施設の若者らが自身の声で地域への啓発活動を行う。



学会参加等

2023年度～

- ・ 日本子ども虐待防止学会滋賀大会
- ・ みんなの声をきかせてシンポジウム
- ・ 日本子ども虐待防止学会香川大会
- ・ ドキュメンタリー映画制作＆上映会
- ・ よつばLABO展示会開催
- ・ 滋賀県南部介護サービス事業者協議会 定期総会 & 記念講演

① 「生きづらさ」や「トラウマ」による課題

- 若者が抱える「生きづらさ」や「トラウマ」による課題は、当事者と支援者のみの努力では解決できない。地域全体がトラウマインフォームドケア（TIC）の観点を持つことが必要。
- トラウマにあわせた居場所の選択肢が少なく、自分の感情を調整できる空間が足りていない。

② 地域と子ども、若者をつなぐ場の不足

- トラウマがありながらも、地域と子ども、若者を**自然につなぐ**拠点整備が進んでおらず、長年の課題となっている。

3. 提案内容

日本初のTiDを用いた自立援助ホームの設立



1階：表現・発信の場

- ・カフェ、交流スペース
- ・学習スペース
- ・スタジオ（防音室）

2階：入居者の共有スペース

しつらえやボリュームが異なる複数の空間を用意。居場所の選択肢を拡充する。

3階：入居者の個室

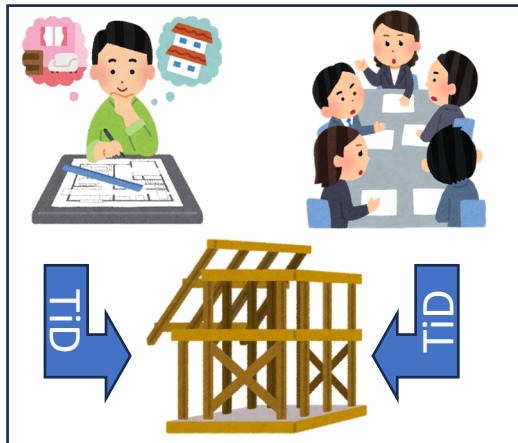
採光面積を確保し、室内ながらも自然環境を意識することができる。

トラウマインフォームドデザイン（TiD）とは、設計段階から関係者全員が、トラウマインフォームドケア（TIC）の眼差しを持ち、ヒューマンセンタードデザイン（HCD）を基調しながら空間設計をしていくもの。TiDの考えに基づいて設計をすることで、支援の効果を上げるのみならず、地域全体にTICの眼差しを養成する。若者たちの生きづらさの減少に寄与する。



4. 期待される効果

関係者全員がTICの眼差しを持って設計・建設 (TiD)



効果

交流・活動の場 × 自立援助ホーム
TiDな新しい福祉施設の誕生

よりトラウマに配慮した施設へ



活動を通して
自然とつながる

建設過程
施設運営
調査アンケート
情報公開



〈地域〉 「トラウマ」への理解が進み、地域全体で生きやすい環境を整備。助け合いが起こる優しい地域づくりに寄与。

〈施設〉 福祉建築の重要な設計プロセスの一例となる。これからの中の福祉施設の眼差しとして、新たな視点を提供。

〈支援〉 支援効果及び質の向上。地域に視野を広げることによりトラウマ発症の未然防止にも取り組む。

〈若者〉 意思表明の機会拡充、自己肯定感の向上。居場所の選択肢拡大、支援を選び、社会とつながる仕組みを広げる。

5. 検証方法

【課題設定型・事業者提案型】

入居者、職員、1階利用者へのアンケート調査実施

空間の使用状況と使用者の心的変化を検証。TiDの思想を持って整備された空間が、実際にトラウマインフォームドな環境を作れているかを評価し、横展開を可能にする。

指標の候補として、入居者の「安心して生活できる」との回答率85%以上、地域住民の「若者との関わりに肯定的」との回答率70%以上、入居半年後の自己肯定感（「自分に価値があると思う」）肯定率を20%以上にする等を想定。

トラウマインフォームドケア研修においてアンケート調査実施

法人職員、関係者に対してトラウマインフォームドの研修を行い、施設の運営、若者へのケアの質の向上や、職員の二次受傷の軽減を図る。研修前後のアンケート調査及び、その結果の検証を行う。

指標の候補として、研修後「理解が深まった」と回答する割合を80%以上、職員の二次受傷に関するストレス自己評価を20%以上軽減する等を想定。

調査、検証には一般社団法人TiCC（武庫川女子大学 大岡由佳准教授、兵庫県立尼崎総合医療センター小児科長 舞原敏郎医師）に入っていただき、客観的に結果や効果を検証してもらう。